

「概ね10年後の県を展望し、元気な県づくりを進めるための方策について」

これまで実践してきた街づくりや文化財保全の活動をもとにして県の総合計画について施策提案とする。

2016.11.15

県の将来はこれまでの風土や県民性を受け継ぎ発展させて築くものとする。ここでは、何をどう受け継ぎ発展させるかという問題設定で、元気づくりの県については(多くの問題のうち一番大事な)人間に着目して県民性(意識)の熟成を如何に図るかとして構想を述べることにする。

意識着目の理由は二つある。第一には、将来の県では、観光や工業など産業の一層の振興には技術開発を始め種々システムの整備・構築はいうに及ばないが、同時に人間性を問う時代的風潮も日増しに強まっていること。第二には、そもそも県民あつての元気な県があり、そこには物質的豊かさでなく精神的豊かさの追求とあらは、県民の意識の醸成は不可欠だからである。ただし、意識は変革ではなく醸成にあることを付記しておく。

まず県民の意識から述べる。富山は、これまで海と山の恵みを受け、幸がいつぱいの土地柄であり、勤勉で忍耐強く、しかも地元を愛し、人を愛しみ、自然との調和を感受性においても感性においても、楽しんでいる。しかも、そこには富山独特の奥ゆかしさの文化も脈々と流れていて、「自分をへりくだって良さに対して正当な評価を他に押し行けないし(たいしたこと無い、普通、どこにもある)、(講演会では質問せずとして)自己主張を避け、自分よりも他者に業績を譲り勝ち」といったことがあげられる。こうした意識を富山県民の偏屈さと都会からは揶揄されているが、そうではなく奥ゆかしさを未来への継承・発展を考えることが求められている。

では意識醸成をどう進める。これには日常生活の充実を図るしかないとする。まず、小学校区域や時には町内会レベル域としての生活圏の設定と、そんなロケーションに基づいた住民各位の本業と地域活動などの営みを考えることにする。前者については、生活圏を程よい広さにしておくべきであり、後者については、本業があつての地域住民の存在をいいたい。こうした

生活圏とワークのもとに、営みがあれば、ほっておいても圏内では負担にならない程度の最適なつながりが生じ、意識がより醸成することになり、また地域アイデンティティが形成されていくものと思っている。ことさら、街づくり、活性化、賑わい創成などのお題目を唱えなくてもいいというのが私の考えである。県行政はそうした地域の動きを支援することで、県全体の意識から来る独自性が磨かれることであろう。

以上のように考えて、生活圏からの具体的方策を述べたい。

(1)街について： 街での生活圏を確実なものにするために、小学校の空き教室を地域民のスペースに当て、周辺の公民館ともリンクして「集まる、集う、学ぶ、交わる、行動する」をいつでも実践できるように地域主導を目核化して実践する。

(2)集落について： 集落派限界であろうと大きな枠組みで周辺とつながればそれで十分である。集落未満の集落(未満集落)があつてもいいとする。富山県下全体で皆さんがつながっておればそれでいいのである。ただし、そこにはインフラはライフラインではなくパーソナル化が必要。

(3)生活圏の整備： 居住環境をもっといきいきしたものにする。これには、空き家は観光で活用できるもの以外は壊して、再開発ではなく自然に戻す。草原や林に、もともと林を切り開いた宅地であれば林に戻せば十分。水田を宅地にしていたのなら、水田や草原に戻す。

最後に今一度まとめとして： 人がみち足りて生活をするのが大事。ブータンのように。何も著名でなくてもいいのである。ごく普通を当たり前のように蓄積していくことこそ、明日の原動力となる。そんな10年後の県を見据えたいものである。